

王国の儀礼において鉄砲を打ち鳴らす
マンコン王国の男たち



神器の槍をもつ代弁者にメッセージを伝えるマンコン王

植民地化以前にマンコン王国で使われていた伝統貨幣



鍛冶屋の作業場。ふいごやハンマーなど
鍛冶道具が乱雑に置かれている

伝統貨幣 危機一髪

地球を 集める

端 信行 (はた のぶゆき)

本館名誉教授
兵庫県立歴史博物館長



カメルーン

モノとの出会いにはドラマだ

モノを集めるといってもいろいろな集め方がある。カメルーンのある地方では、村に滞在しているあいだに、日常生活用具で要らなくなったモノを集めていると広くアナウンスをして、村びとの方から要らなくなったモノをもつてきてもらうことにした。受けとるときに、材料や名前や使い方など基本的な情報も同時に入手できるので、これは効率のよい集め方であった。しかしこの方法の難点は、ある程度の期間一カ所に滞在し、なおかつ集めたモノを保管しておく場所を確保する必要がある点であった。

また集めたいものがある特定の分野のモノになると、それを所有しているかもしくは所有していない人を訪ね交渉することになる。たとえば仮面などの儀礼関係のモノを収集するときはそのような方法をとる。このような収集では資料をまとめて購入するケースが多いので、事前に搬送や輸出、支払いなどについて十分に準備しておかねばならない。あるとき入念な準備をして再訪したところ、所有者が突然死していたことがあった。購入の話はもちろん破算である。

いっぽうで偶然にモノと出会うということもまた多い。こちらが期待もしていないところで、これまで文献でしか知りえなかったモノの現物に出会うと、これはどうしても入手したくなる。また、すでに現物が無くなってしまったと思っていたモノに出会うこともある。ここに紹介する伝統貨幣の収集はそのような例であった。

鍛冶屋の仕事

熱帯アフリカの農村を訪れると、すごい大きな村になるとたいがい鍛冶屋があった。農具の製作や修理をおこなう鍛冶屋の存在は、農村生活には欠かせない。北カメルーンのドウル族の村の鍛冶屋は、畑仕事をまったくしない鍛冶仕事だけで生計を立てていた。作業場を兼ねる村はずれの彼の家を訪ねると、いつも村びとの誰かがいて話し相手に事欠かないのだった。ときにはとおりがりの旅商人などもここで歩みをとめ、村びと相手に近隣の噂話を披露する光景も見られた。

められており、王国の儀礼では重要な役割を担っていた。マンコンの王を象徴する神器のひとつに鉄製の槍がある。王はさまざまな儀礼に鉄製の槍を携行する。また王のことはを村びとに伝えるときは、代弁者にことばとともに槍を託す。槍を手にした代弁者のことは王のことばなのである。

現代ではこの鉄製の槍は王の象徴として人びとの目に映るが、もちろん本来は武器である。カメルーンがドイツの植民地になる以前は、王国間で争いが絶えなかったという。その時代の主要な武器はこの鉄製の槍であった。鉄製の槍は王の象徴として王国の命をまもる武器でもあった。

くず鉄か文化財か

わたしが訪ねた鍛冶屋は、もはや鉄の槍を作っていないかった。彼はもっぱら鉄砲を作っているという。この鉄砲は火薬を爆発させるだけの、あくまでも儀礼用のものであるが、今ではマンコンの男子が王国の儀礼に参加する時には欠かせない小道具である。彼の鍛冶仕事を観察しつつふと作業場の隅を見ると、一見スプリングのようなかたちをした金属が目についた。あれ

は何かと問うと、むかしの貨幣だということ。かねて話に聞いていた伝統的貨幣で、マンコンではむかしは婚資の支払いに使っていたというモノだ。何にでも使える通貨ではなく目的を限定した貨幣である。わたしはもうすでに無いと思っていたので、小躍りする思いでそれを手にとり、写真を撮ったりノートに書き写したりした。鍛冶屋はそんなに欲しいのならもっていけと言おう。これをどうするつもりだったのかと聞くと、彼はこれをたたき伸ばして鉄砲の部品を作るつもりだったと言おう。ああ、問一髪だった。

時代が変わり、人びとのニーズが変わると、鍛冶屋は当然その時代の人びとが求めるモノを作る。そこでは前の時代の有用品は単なる材料としての価値しかもたなくなる。文化財のように長い時代を生き延びるモノもあるが、ある時代の文化を象徴するモノが、時代の価値観の変化のなかで単なる材料として溶解され消滅した例は、数え切れないほどあるにちがいない。